

◇拠点形成概要

機 関 名	名古屋大学		
拠点のプログラム名称	テキスト布置の解釈学的研究と教育		
中核となる専攻等名	文学研究科人文学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 佐藤 彰一	教授	外 16 名
<p>〔拠点形成の目的〕</p> <p>本プログラムは、21世紀COEプログラムの成果を継承しながら、言語テキスト群の構造解明を中核理論として、若手研究者の効果的育成を目指すことを目的としている。21世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」は、歴史、文学、思想、図像、身振りなど人間社会の多様なテキスト形態を統合的、多角的に解明し、大きな成果を収めた。本プログラムは、教育研究拠点形成という趣旨に照らして、これまで得られたテキスト学の学問的成果を基盤に、人文科学の根源である解釈学の新知見を織り交ぜて、文字・言語テキストの解釈的手法をさらに深化し、「解釈」という知的営為を一新する方法論と教授法を確立することを目指している。新たな視線でテキスト現象を見、その背後にあるコンテキストとテキスト布置を理解する手法を自らの学問的ツールとして体得した若手研究者を育成することが本プログラムの目的である。</p> <p>〔拠点形成計画及び進捗状況の概要〕</p> <p>本プログラムは言語・文字テキストを対象として言語テキスト群のテキスト布置の構造解明を解釈学的な観点から推進するとともに、その研究成果に基づいた教育プログラムを確立することにより、若手研究者の効果的育成を目指すものである。</p> <p>本プログラムの採択後当初2年間では、博士後期課程における教育体制の拡充と国際化を主眼にした教育事業の展開を計画すると同時に、研究事業では21世紀COEプログラムで培った国際的学術ネットワークを活用して、言語、歴史、文学の各グループによる国際研究集会の開催を計画していた。</p> <p>(教育事業)</p> <p>平成19年度後期より博士後期課程学生を対象とした授業科目「テキスト布置解釈学原論」を開講し、本プログラムへの学生の積極的な参加を促したが、平成20年度からは授業科目をさらに拡充し、「テキスト布置解釈学原論」（半期2単位）に加えて研究対象となっている分野ごとに「テキスト布置解釈学各論I～VI」（半期各2単位）を開講し、平成20年度入学生からは「原論」及び「各論」各2単位の取得を課程博士論文提出の必須条件として学生に課す授業カリキュラムの整備を行った。これにより本プログラムを中心として若手研究者の育成を効率的に推進する基盤を固めるとともに、課程博士論文の提出を効果的に促す体制が整った。</p> <p>こうした教育制度改革の取り組みと並行して、平成19年度からは若手研究者育成の対象となっている博士後期課程の課程博士論文執筆に対する支援事業も展開した。具体的には、論文顕彰制度「グローバルCOE論文賞」及び課程博士論文作成支援制度「大学院学生海外派遣事業」の創設である。「論文賞」は平成19・20年度あわせて3回の募集を行い、グローバルCOE学術委員会の下に置かれた論文賞選考委員会による選考の結果5編の論文を優れた研究成果として認め、グローバルCOE学術委員会がこれを顕彰した。「海外派遣事業」についても、平成19・20年度あわせて3回の募集を行い、グローバルCOE学術委員会の下に置かれた海外派遣事業選考委員会が応募者の中から計7名の計画を選出して研究助成を行った。学位論文を作成している大学院学生がこれらの制度を有効に活用することにより、国際的レベルで質の高い課程博士論文の提出を期待することができる。また、ポスドク研究員に対しても、月1回のブリーフィングを実施しており、平成20年度末までに12回を開催している。</p> <p>(研究事業)</p> <p>研究事業としては、拠点形成プログラムの開始直後から積極的に国際研究集会を企画した。平成19・20年度に開催した国際研究集会は以下の通りである：</p> <p>第1回：Philological and Grammatical Studies of English Historical Texts（平成19年9月7～9日。本学にて開催。）〔平成20年9月プロシーディングス発行。Peter Lang社より〕</p> <p>第2回：Balzac, Flaubert. La genèse de l'oeuvre et la question de l'interprétation（平成19年12月14～16日。本学にて開催。）〔平成20年3月日本語版プロシーディングス発行／平成21年2月フランス語版プロシーディングス発行〕</p> <p>第3回：Identity in Text Interpretation and Everyday Life（平成20年2月9～10日。本学にて開催。）〔平成20年12月プロシーディングス発行〕</p> <p>第4回：日本における宗教テキストの諸位相と統辞法（平成20年7月19～21日。本学にて開催。）〔平成20年12月プロシーディングス発行〕</p> <p>第5回：La Mise en texte des savoirs（平成21年3月5～7日。フランス・パリ東大学他にて開催）</p> <p>第6回：Herméneutique du texte d'histoire : orientation, interprétation et questions nouvelles（平成21年3月7～8日。東京国際フォーラムにて開催）</p> <p>研究論集『HERSETEC』も欧文編と和文編を毎年発行しており、教育事業で言及した顕彰論文も同誌に掲載している。</p> <p>さらに、国内外から招聘した研究者による講演会等を平成20年度末までに計19回開催している。</p> <p>(その他)</p> <p>本プログラムのすべての事業については、Webとメール・マガジンの利用に加えて広報誌として『GCOE Newsletter』を発行し、拠点内外への情報発信に努めている。広報誌は平成20年度末までに4号を数えている。</p>			

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価

(総括評価)

当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。

(コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、大学として「グローバル高等教育研究機構」を創設し、その中にグローバルCOEプログラム拠点を位置付けて、国際的に卓越した教育研究拠点形成への取組みを行っており、評価できる。

拠点形成全体については、授業カリキュラムの整備と開講科目の必修化、海外の大学との交流協定締結など、具体的かつ堅実な取組みが行われているが、拠点の活動が従来型の文献研究に留まっているように見受けられる。

人材育成面については、大学院学生海外派遣事業やグローバルCOE論文賞を創設するなど、若手研究者の研究意欲を増大させる手立てが講じられており、評価できる。

研究活動面については、従来型ではあるが、相当数の優れた成果をあげていると評価できるが、「テキスト布置解釈学」という新たな名称に対応するような理論の構築はまだ道半ばであり、その展開を目指した取組みが、プログラムの全ての分野で同じ歩調で行われているとは言い難く、アジアの観点を一層自覚的に取込みつつ、とりわけ日本の諸学におけるテキスト布置解釈学の創造的取組みを実践する努力が求められる。

補助金の適切かつ効果的使用については、これまで全ての項目についてバランスよく効果的に使用されている。

留意事項への対応については、審査結果の指摘に基づいて、計画の修正と改善に努めていると評価できる。

今後の展望については、本プログラムの展開する教育・研究活動の質の高さと国際的広がりを考慮すれば、本事業終了後、本拠点が「グローバル教育研究機構」の構成組織と位置付けられ、人文科学を活性化する拠点として展開する努力がなされることが期待される。